

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第138回演奏会

The New Symphony Orchestra the 138th Concert



チャイコフスキー
幻想序曲

ロメオとジュリエット

Peter I. TCHAIKOVSKY : Fantastic Overture "Romeo and Juliet", 1880

芥川也寸志

AKUTAGAWA Yasushi : Trinita Sinfonica, 1948

交響三章

リムスキー=コルサコフ

交響組曲

シェエラザード

Nicolai RIMSKY-KORSAKOW : Symphonic Suite "Scheherazade", 1888

ヴァイオリン独奏: 都河和彦 (新交響楽団コンサートマスター)

TSUGAWA Kazuhiko, Violin

指揮

フアンシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, Conductor

1993年1月30日(土) 7:00pm.

東京文化会館

Saturday, January 30, 1993 Tokyo Bunka-Kaikan Main Hall (JR Ueno sta. West Exit)

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第138回演奏会

The New Symphony Orchestra The 138th Concert



指揮：フランシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, conductor

チャイコフスキー：幻想序曲「ロメオとジュリエット」

Peter I. TCHAIKOVSKY : Fantastic Overture "Romeo and Juliet", 1880

芥川也寸志：交響三章

AKUTAGAWA Yasushi : Trinita Sinfonica, 1948

第1楽章 カプリチオ *CAPRICCIO Allegro*

第2楽章 ニンネレラ(子守歌) *NINNERELLA Andante*

第3楽章 フィナーレ *FINALE Allegro vivace*

——— 休 憩 ———

intermission

リムスキー=コルサコフ：交響組曲「シェエラザード」

Nicolai RIMSKY-KORSAKOV : Symphonic Suite "Scheherazade", 1888

第1楽章 海とシンドバッドの船

Largo e maestoso — Allegro non troppo

第2楽章 カランダール公の物語

Lento — Andantino — Tempo giusto

第3楽章 若き王子と若き王女

Andantino quasi allegretto

第4楽章 バグダッドの祭・海・船の難破

Allegro molto — Vivo

* 各楽章の標題は総譜再版時にとり外された。

ヴァイオリン独奏：都河和彦(新交響楽団コンサートマスター)

Violin Solo : TSUGAWA Kazuhiko, Concertmaster

1993年1月30日(土) 7:00p.m.

東京文化会館

主催：新交響楽団



photo : H. Binet

●指揮

フランシス・トラヴィス

Francis TRAVIS, conductor

1921年米国デトロイト生まれ（69年スイスに帰化）。ウェイン大学、ミシガン州立大学、同大学院をそれぞれ卒業・修了。48年よりヘルマン・シェルヘンに指揮法を学び、チューリヒ大学ではヒンデミットの下で音楽博士号を取得した。以後は指揮者としてドイツ、イタリア、オランダ、ベルギー、スカンディナヴィア3国を中心に国際的な活動を行う。

ベルリン芸術週間、ルツェルン音楽祭をはじめとするヨーロッパ各地の音楽祭にも数多く出演して好評を博す。レパートリーはきわめて広く、中でも現代音楽の優れた解釈には定評がある。スイスの国際現代音楽協会の会長もつとめた。現在までの作品初

演は1,000曲を超えている。

バーゼル歌劇場の常任指揮者をつとめた後、22年間ドイツ・フライブルク音楽大学教授としてオーケストラ指揮者の育成に尽力した。

90年より東京芸術大学の指揮科客員教授として来日。芸大での教育・指揮活動の他にヨーロッパでも引き続き各地で客演指揮を行っている。新交響楽団とは91年4月のスクリャービン交響曲第2番で初の客演、92年1月にはベルク「ヴォツェック」より3つの断章、シューベルト交響曲第9番他、また同年11月には合宿や音楽教室、とうきょうエキコン等にも出演、いずれも好評を博した。

チャイコフスキー：幻想序曲「ロメオとジュリエット」

Peter I. TCHAIKOVSKY: Fantastic Overture "Romeo and Juliet"

いがみ合うモンタギュー家とキャピュレット家、ロメオとジュリエットの悲恋を描いたシェークスピアの戯曲「ロメオとジュリエット」はあまりにも有名である。この物語は多くの作曲家の作曲意欲をそそるものとみえ、本日演奏されるチャイコフスキーの「幻想序曲」をはじめとして、ベルリオーズの「劇的交響曲」、プロコフィエフの「バレエ音楽」、さらにはバーンスタインの「ウェストサイドストーリー」も「ロメオとジュリエット」からの翻案である。ほかにも知られていない曲がたくさんあることだろう。

チャイコフスキーはこれを、友人でありまた「ロシア五人組」の指導的立場にあったバラキレフの強い勧めによって書いたといわれる。バラキレフもシェークスピアの愛好者で、「ロメオとジュリエット」の作曲にはチャイコフスキーの才能が向いていることを見通して勧めたものである。

作曲当時チャイコフスキーはフランスのオペラ団のプリマドンナ、デジーレ・アルトーに失恋したばかりで、その心はロメオとジュリエットの悲恋物語にぴったりであったのだろう。

曲は比較的スムーズに完成したが、バラキレフは曲の性格や調性にあれやこれや口出しをしたらしい。そのせいかどうか、1869年にいったん完成しバラキレフに捧げられたこの曲をチャイコフスキーは翌年すっかり書き直してしまう。あるいは、失恋の勢い(?)で書いてはみたものの1年たってみるとやはり感情に流されすぎた部分が目につき、書き直しをしたのかも知れない。それでもまだ気に入らないところがあったらしく、10年ほど経った1881年にさらに筆を加え、これが今日の決定稿となっている。

●

さて、曲はクラリネットとファゴットによる荘重な序奏によって始まる。これは修道僧ローレンスの慈悲を表わしている。両家の激しい争いを示す強烈な第1主題（楽譜1）のあと、第2主題、コーラングレとヴィオラによるロメオとジュリエットの愛

を表わすやさしい、しかしどこことなく不安と哀しさを含んだメロディーに入る（楽譜2）。展開部では両家の反目がさらにはっきり表わされる。終末では不吉なティンパニが悲劇を暗示し、愛の主題が断片的に奏されて2人の昇天と永遠の安息が告げられる。

●

余談だが、この「ロメジュリ」は、ふだんあまり主役のメロディーに恵まれないヴィオラ奏者にとっては心を込めて歌えるところがたくさんあるうれしい曲である。新響は昔から日本人の初期の作品を紹介しているが、習作的なもののヴィオラパートは概してつまらない。西洋の曲も同様である。名曲といわれるもののヴィオラパートは、たとえば伴奏的なメロディーやリズムだけであったとしても（ヨハン・シュトラウスのワルツなどは始めから終わりまでほとんどワルツ・リズムだけであるが）歌えるのである。

（ヴィオラ・岡本 明）

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、コーラングレ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、大太鼓、ハーブ、弦5部

《楽譜1》



《楽譜2》



芥川也寸志：交響三章

AKUTAGAWA Yasushi : Trinita Sinfonica

芥川也寸志（1925～1989）は、文豪芥川龍之介の三男として東京に生まれた。

「交響三章 — Trinita Sinfonica」は東京音楽学校（現東京芸術大学）の卒業作品として1948年に作曲され、翌年自身の指揮によってNHKより放送初演された。作曲者23歳の時のこの作品は、題名どおり性格的に描き分けられた3つの楽章から構成され、各楽章には内容にふさわしい表題が注意深く名付けられている。

芥川が伊福部昭に師事し、決定的な影響を受けたことはよく知られている。伊福部は作曲の原点を民族の特性に置くことこそ、作品が民族を越えた普遍性を得る道であると説いている。3代続いた江戸っ子である芥川は、この作品の中に江戸祭り囃子のリズム（雅楽ではなく！）や、都会的な空気を感じさせるいくぶんユーモラスで軽快なリズムと響きを取り込み、土俗的な師の作品の影響を見せながらも、自己の原点を明確に表現した。



第1楽章 カプリチオ(奇想曲) アレグロ

ファゴットの明快なリズムに乗ってクラリネットにより主題が提示される。フルート、弦楽器、ピアノなどに引き継がれ、主題の一部から採ったリズムや祭り囃子のリズム（2/4  3/8 ）などを加えて愉快に展開する。これらのリズム動機は、この曲の第3楽章や、後年ニューヨーク・カーネギーホールでニューヨーク・フィルハーモニーによって初演される傑作「弦楽のための三楽章」に再び使用される、芥川初期の作品の重要なテーマである。冒頭のクラリネットによる主題が回想され静かに終わる。

第2楽章 ニンネレラ(子守歌) アンダンテ

三部形式の美しい楽章である。長いドローン（単調な持続する低音）を伴ったパストラル風の間奏部は、「メランコリックに」と指示された歌がいくぶん伊福部的であるだけに、青年芥川の師と音楽への憧れを歌っているようでもあり、強く胸に迫る。

第3楽章 フィナーレ(終楽章) アレグロ・ヴィ

ヴァーチェ

フィナーレという言葉は、終楽章という意味に加えてハッピー・エンド、最後の勝利などの意味を持つこともあるが、これにふさわしく祝祭的な楽章である。フル・オーケストラで花開くように始まり、途中、弦楽器による伊福部的かつ日本的なリズム（5/8 ）動機を挟みながら、最後は熱狂的に幕を閉じる。



芥川は著作「音楽の基礎」（岩波新書）のなかで、「作り手→弾き手→聞き手→作り手という循環の中にこそ音楽の営みがある」と書いている。氏の生涯にわたる活動を回想するとき、この言葉を実現させようとして持てるもののすべてを注ぎ込んで燃焼させた、希有な人生の軌跡を確認することができる。— Noblesse Oblige（位高き人、務め多し）—

作り手の立場として作曲活動から著作権保護活動まで、弾き手の立場として仙台フィルハーモニーの育成から新交響楽団による「日本の交響作品展」まで、また聞き手の立場として音楽啓蒙番組のプロデュースから中新田バッハホール、サントリーホール、東京芸術劇場などの企画・実現まで、そして、ひとりの現代社会に生きるものとしては政治的立場の表明から反核運動まで、音楽に関連するあらゆる時と人と場に理想を追求し続けた氏の幾多の業績を、いま何万、何十万もの人々が享受している。

明日1月31日は芥川先生の命日である。葬儀の当日、柩が自宅から出ようとしたまさにその時、雪が天から静かに舞いおりてきてまもなく止んだ。

忘れられぬ光景である。

私たち新交響楽団は、芥川先生の作品を忘れることなく演奏し続けたい。

（ヴィオラ・奥平 一）

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、弦楽5部、ピアノ、ティンパニ、小太鼓、大太鼓

リムスキー＝コルサコフ：交響組曲「シェエラザード」

Nicolai RIMSKY-KORSAKOV: Symphonic Suite "Scheherazade"

リムスキー＝コルサコフは、バラキレフ、キュイ、ボロディン、ムソルグスキーとともにロシア国民楽派の〈五人組〉に数えられる作曲家である。彼は幼時から音楽の才能を示してはいたものの、軍人としての教育を受けた。海軍兵学校在学中の1861年にバラキレフと出会い、彼の指導により作曲を始め、〈五人組〉の仲間に加わった。なお、その後も11年あまり海軍将校としての仕事は続き、彼が職業音楽家として歩み始めたのは1873年、29歳の時であった。

●

交響組曲《シェエラザード》は1888年8月7日、作曲家44歳の時に完成され、前年に作曲された《スペイン奇想曲》とともに、数多くの作品の中でも最も広く演奏され、親しまれている曲である。

その理由は、この曲がアラビア文学の中でも最も多くの外国語に翻訳され、多くの人たちに親しまれている物語「千夜一夜物語（アラビアン・ナイト）」から着想を得ているからだだろう。物語はおよそ次の通りである。

「サルタンのシャーリアールは、稀有の名君として国民の信望を一身に集めていたが、彼の留守中に妻が奴隷と浮気をしていることを知って、怒りのあまり2人の首を刎ねてしまう。それ以来、女性是不実で不貞なものだと考えるようになったシャーリアールは、毎晩若い娘を迎えては一夜を過ごし、朝になると必ず首を刎ねてしまうという暴君に一変してしまった。

ある日、大臣の娘シェエラザードが妹のドニアザードとともに参内し、妹との打ち合わせ通りにシャーリアールに興味ある物語を語って聞かせた。彼女の物語は詩人の詩句を引用したり民謡を織りまぜた不思議なもので、次第にその話の面白さに引き込まれた彼は、続きを聞きたいばかりに彼女の処刑を1日1日と延ばしていき、物語が千と一夜もの間続いた後、ついにシャーリアールはその残酷さを完全に放棄した。彼はシェエラザードを妻に迎え、以前にもまさる名君として国を治めるようになり、2人はいつまでも幸せに暮らした」

リムスキー＝コルサコフは、シェエラザードが語った物語の中から4つを選んで交響組曲にまとめたが、これらの物語にはお互いに関連があるわけではない。しかも、「千夜一夜物語」の中には似た話がたくさんあるので、それぞれがどの物語を指しているのかはわからない。

しかしながら、4つの楽章は2つの主題によって結びつけられている。ひとつは威厳に満ち、堂々としたシャーリアールの主題、もうひとつはやさしく愛らしい幻想的なシェエラザードの主題である。これらは各楽章にわたってさまざまに形を変えて現われる。

●

シェエラザードの物語はそれぞれ夜に始まり、朝の光が近づくとともに結ばれるが、各楽章に現われるこの主題はまさに物語の始まりと終わりを示すものである。目の前で本当に彼女が語っているかのようなこの旋律は独奏ヴァイオリンによって奏されるが、この楽器の叙情的で感傷的な音色は、どこことなく妖しく不思議な魅力を持つこの旋律ときわめてよく合っている。

この曲で独奏ヴァイオリンが重要な役割を果たしていることは、リムスキー＝コルサコフが1883年の秋から宮廷礼拝堂の副指揮者となって、ヴァイオリン教師のクラスノクツキーと親交を深めるようになり、ヴァイオリンという楽器のヴィルトゥオーソの効果に強い興味を抱いたことがきっかけとなっている。その結果、1886年の独奏ヴァイオリンと管弦楽のための《ロシアの主題による協奏曲》をはじめ、1887年《スペイン奇想曲》、1888年《シェエラザード》、《ロシアの復活祭序曲》といった独奏ヴァイオリンを活用した曲が次々と生まれ、その後の作品にも大きな影響を及ぼすこととなった。

初演は1888年10月28日、作曲者の指揮によりペテルブルクで行われた。総譜の出版は1889年。

（トランペット・島丸 睦美）

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2（1番はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ、シンバル、大太鼓、小太鼓、トライアングル、タンブリン、タムタム、ハープ、弦5部。

ベルリン芸術週間参加のための 寄付のお願い

新交響楽団は今年9月5日～10日にベルリン芸術週間に参加いたします。石井真木の指揮のもと、同氏作曲の「浮游する風」、伊福部昭の「マリimbaとオーケストラのためのラウダ・コンチェルタータ（独奏：安部圭子）」、そして藤田正典の委嘱新作という全曲邦人プログラムを演奏します。これは今年の芸術週間のテーマ「日本」をふまえたものです。

歴史的な経緯からヨーロッパで最も「前衛的」な都市のひとつであるベルリンで日本を代表する現代音楽の一端をアマチュアオーケストラの新交響楽団が紹介することは大きな意義を持つものと自負しております。

演奏旅行の予算総額は約6,900万円（団員旅費滞在費・楽器運搬借用料・指揮者および独奏者謝礼他）で、このうち芸術週間事務局が約200万円負担、団員の個人負担を約4,000万円として、残りの約2,900万円を公的・民間の基金や助成に負う計画ですが、昨今の不況の中で経済の悪化はこの分野への支出をまづ直撃しており、資金の調達に厳しい状況です。

ここで入場料をお支払いいただいた聴衆の皆様に対して誠に勝手なお願いではありますが、この厳しい状況をご賢察の上、ご寄付をいただければ幸いです。なお、ご寄付をいただける場合は、ホール出口の寄付受付で承っておりますので、よろしくお願い申し上げます。また、郵便振替（新交響楽団維持会：東京3-28074、裏面通信欄には「ベルリン演奏旅行」とご記入ください）でも承っております。

なお勝手ながら金額は1口2,000円、1口以上をお願い申し上げます。また、ご寄付いただきました方のお名前は演奏会プログラムに掲載させていただきます。（文中敬称略）

1993年1月30日

新交響楽団



音楽のHAPPYはL♥VEで返そう。

聴いてるだけじゃないんだと思う。ときどき一緒に歌っているし、たまに胸の奥が熱くなる。
音楽があると、淋しい部屋がちよっと明るくなって、トゲトゲした気持ちがまあるくなったりする。
HAPPYになるんです、きっと。プレゼントをもらったらありがとうをお礼を言うみたいに、こんな幸せな気持は愛でお返ししたいね。
JASRACは著作権の管理を通して世界の音楽をたいせつに守っています。